Elizabeth Gaskell の *Wives and Daughters*

── governess の テーマをめぐって ──

中 村 祥 子

1

Wives and Daughters に登場する人々のうち，Mr. Gibson の再婚相手になる Mrs. Kirkpatrick と，彼女の娘 Cynthia Kirkpatrick の二人は，美事な出来栄えとして，ほとんどの批評家によって称賛されている。例えば A. B. Hopkins は

> Mrs. Kirkpatrick，旧姓 Hyacinthe [*sic*] Clare は，Mrs. Gaskell が最も巧妙に創った人物像の一人である。. . . 芸術的に見て Cynthia Kirkpatrick も，Mrs. Gibson に次いで，Mrs. Gaskell が創造した最も素晴しい女性像であると言っても過言でない . . . 。[1)]

と評している。

二人の魅力は，しばしば，ヒロイン Molly Gibson 以上であるとされる。Margaret Lane は

> 彼女〔Molly〕は完璧にヒロインとして適任で，読者は徐々にそして心から彼女を好きになる。しかし Mrs. Gaskell がこの小説で大成功を収めているのは，顔と態度は魅力的であるが節操に欠けている Cynthia と，更に，心が狭くて自分本位で俗人の，彼女の母親とである。[2)]

と指摘し，作者は，Cynthia に対してはともかく，母親の方の「かつては，その地域の名門の家庭教師をしており，自分の生計のために，田舎の医者と再婚する魅力的な未亡人」[3] の姿を，作中で「容赦なく解剖して見せている」と言っている。

ところで Gaskell がこの母娘の人物造形に成功していると言えるのは，どういう点に於てであろうか。それは「予想通りの反応を起こし過ぎる」[4] Molly の‘単調さ’に比して，この二人が示す性格の複雑さのせいであるとされることが多い。

この母娘を高く評価する批評家達は，先ず二人のこの側面に注目している。例えば「Cynthia 像は，まことに素晴らしい傑作である」[5] とする David Cecil の評価に代表的に見られるように，Mrs. Gibson も Cynthia も共に，その性格面での「ユニークさ」や「複雑さ」が評価される。

> Cynthia は本質的には Turgenev の女主人公たちと同じく複雑で，魅惑的なグループに属する女性である。そして Mrs. Gaskell は彼女の言動を巧みに，しかもたっぷりと語ってくれるので，彼女の性格は . . . はっきりわかる。われわれは生きた人間を知るように，彼女のことがわかるのである。[6]

同じように Margaret Ganz も

> Mrs. Gibson と Cynthia を創造し，作者は二人の浅薄な性質を持つ人物の，複雑で，しばしば矛盾した面を描写しただけでなく，彼女達を通して，人間のすべての弱点がもつパラドックスを示唆した。[7]

と述べている。そして彼女達に対して作者が，道徳的判断を直接下さないで客観的記述に徹する時，彼女達の造形に一層成功していると指摘している。[8] これは Cecil が「彼女［Gaskell］は Cynthia を分析せず，ただ彼女が何を言い，何をしたのかを語るだけである」[9] という点に，作者の鋭さ

を見ていることにも通じるであろう。もともと，*Wives and Daughters* については，Mrs. Gibson と Cynthiaに限らず，「この小説の価値は，筋にあるというより作中人物達の方にある」[10] とする，'既定の' 評価もある。

しかし Mrs. Gibson の「計算されつくした偽善と，妄想に駆られた虚栄心」[11] や，「生得の利己主義，追従，精神のいやしさ」[12]，「彼女の愚かさ，策略，欺瞞，悪意のない嘘」[13]，そして（Mrs. Gibson の娘としての資格が充分にあると同時に，母よりも複雑なところを持つ）Cynthia の性格[14] などは，彼女らの単なる個性としての魅力や興味を与えるだけではないと思われる。

作者の技術的な力量の向上を指摘し，彼女らを意図的な悪人に描いていない点にリアリティを見い出す[15] 批評が多いが，勿論それもあろうが，むしろ登場人物達のリアリティは，彼らが Hollingford という町で行動することを通して，彼らの性格が「生きた人間」[16] のそれになっているからであろう。

例えば Coral Lansbury は，

> Gaskell は Hollingford のような町やその周辺のいなかが，牧歌的精神よりも金銭ずくの精神で支配されているのを察知している。[17]

点に注目している。「お金の問題が，汚れた１本の糸のように縫いこまれている」[18] この小説の世界に於て，登場人物達の起こす行動にはそれぞれ必然性があるし，また彼らの生活の具体的な記述が，彼らの実在感を高めている。そういう具体的な彼女らの生き方の提示が，彼女らの性格のリアリティを裏打ちしているのだと思われるのである。この点に於て，先ず Mrs. Gibson を，次いで Cynthia の場合を分析してみたい。

2

Wives and Daughters は医者の Gibson 家を中心に物語が展開する。Hyacinth Clare[19] は再婚して Mrs. Gibson になるので，彼女が作中で実際

に描かれているのは（冒頭の園遊会の場面で，小さい頃の Molly をめぐるエピソードに登場するときを除いてはすべて），Mr. Gibson との再婚問題が持ち上って以降の ――つまり彼女が40歳になる直前からの ――姿である。しかし彼女がそれ以前にどのような生活を送ってきたのかは，回想や思い出話や人のうわさ話など，様々な形で言及されるので，読者は彼女が「たった17歳に過ぎなかった頃，はじめての勤め口 Mrs. Duncombe のお宅の勉強部屋」[20] に居るところからの，彼女の生き方をほとんど知ることができる。それは一言で言えば当時の家庭教師の生涯である。Henry James が，Mrs. Gibson の中に，「Becky Sharp を溶かして薄めたもの」を認めているのは，単に「計算されつくした偽善」[21] の要素が二人の女性に共通しているからというだけでなく，家庭教師の定められたコースから，何とか抜け出ようとした生き方を，二人が辿るためであろう。

作者が *Wives and Daughters* で描いている重要なテーマの一つは，いわゆる「governess の問題」なのである。J. G. Sharps は，

> *Wives and Daughters* で Mrs. Gaskell は初めて，とにかく governess 達を扱っている。. . . 多くの十九世紀の女流作家達と違って，Mrs. Gaskell は，governess の問題は比較的軽んじていたけれど，それでも，気が進まないながらにも教えるしかなかった，独身女性達や未亡人達の問題にはよく通じていた。[22]

と述べている。（*Ruth* のヒロイン Ruth も，或る時期確かに governess だったと言えるが，その作品では governess は，皆から敬愛されこそすれ，それ自体には問題の無い，望ましい職業として描かれていた。）

17歳で家庭教師としての一歩を踏み出した Clare は，20歳前後の数年間は，貴族の Cumnor 家の，特に一番下の娘 Lady Harriet の家庭教師として働いている。ここでの体験は，後で見ていくように，様々な点で Clare に大きな影響を与えた。しかし実際に彼女がこの the Towers の人々の家庭教師をしていた時期は，ほんの二年余りだったのではないかと思われる。

Clare の名前が作中初めて言及される時（それは主要な物語が始まる五年程前で，その時彼女は三十代前半だが），彼女が the Towers の家庭教師をしていたのは，「今から約12年か14年前」（p. 9）であったと記述されている。それから「彼女は愚かにも貧しい牧師補と結婚し，くだらない Mrs. Kirkpatrick なんぞになった」（p. 9）と話されており，彼女が結婚によって Cumnor 家の家庭教師をやめて去ったことは明らかであるが，また別の箇所では Lady Harriet が，「Clare が結婚した時，私は10歳になっていなかった。そして私はもうすぐ29歳だわ」（p. 104）と述べているし，Clare の娘の Cynthia が現在17歳になっているので，Clare は21歳の頃には，結婚して家庭教師をやめたことになるだろう。

この，結婚によって，「お金のためにあくせく働く」（p. 110）ことから早々と免れるという生き方は，美貌の女性で，「大変役に立つし愛想もよく，それに大変感じのよい身だしなみをしている」（p. 102）Clare にとっては，決して唐突なものではない。

Clare はもともと教育に何の情熱も持っていなかったのかもしれない。例えば彼女が17歳で初めて家庭教師になった時の印象深い思い出として，後に Molly に語る話の内容は，「フランス人なら ‘恋する男’ と言うであろう，或る大変魅力的な青年 Harper 中尉のこと」（p. 752）である。また彼女は「教育について余りやかましくない親なら，喜んで家庭教師として雇っておいたであろう」（p. 102）そういう類の先生だったと，昔の生徒 Lady Harriet が皮肉に評している。

しかしそれでも，自分の教えねばならない少女達を，Clare が，「人生の災い」（p. 142）と呼ぶに至る過程は，彼女が家庭教師として経験しなければならなかった生活の実態を明らかにしていると言える。

Mrs. Kirkpatrick は，少女というものにはうんざりしていた。彼女の人生のすべての試練が，少女達とどこかで関係があった。彼女が初めて家庭教師になった時，彼女は大変若かった。そして彼女が行った最初の場所で，生徒達との闘いで負

かされていた。. . . 彼女は常に，いたずら好きな，或いは手に負えない，或いは真面目過ぎるか，或いは手厳しい裁断をする，或いは好奇心が強い詮索好きな，少女達と遭遇してきた。. . . 少女達を抽象的に「人生の災い」として嫌う彼女の嫌悪感は，Ashcombe で「お嬢様方」のための学校を彼女が経営しているという事実によっても,減じることはなかった . . . 。(pp. 141－2)

その上，彼女を雇っている親達との関係がある。彼女は「常に自分の立場を覚えていなければならなかった」(p. 120) が，それは彼女に屈辱的な態度を強要するものだったはずである。

もはや雇い主ではなくなった the Towers の人々が，Mrs. Kirkpatrick を，（そして Mrs. Gibson になってからも）相変わらず結婚前の呼び方で「Clare」と呼び続けること（「Lady Cumnor は Mrs. Gibson をあくまで『Clare』と呼び通した」(p. 320)）を念頭に置き，彼女が求婚者の Mr. Gibson に向かって，

「私を Hyacinth と呼んで下さい。. . . 私は『Clare』という呼び名には耐えられません。それは私に余りにも家庭教師であることを思い出させます。そしてそういう日は今やすっかり終わったのです。」(p. 120)

と言う場面がある。このせりふは，再婚相手の Mr. Gibson も後に，

「私は Clare という呼び名には耐えられない。それは the Towers の奥方やそこの家族全員が彼女を呼んでいる呼び方だ。」(p. 137)

と，全く同じ表現で繰り返すので一層強調されるし，まためずらしく Clare が真情を吐露する場面なので，印象深い。the Towers を初め家庭教師先での彼女の生活が，彼女にとってどういうものであったかをよく忍ばせている。

美しく，常に多くの求婚者に囲まれていた若い Clare が，Mr. Kirk-

patrick との結婚によってそういう生活に終止符を打つ気になったのは，当然であろう。この時も Clare は，「その他に三つの結婚申し込みを受けていた」(p. 104) のである。Mr. Kirkpatrick とでなければ，他の誰かと早晩結婚したことであろう。

この時彼女が幾つかの選択肢の中で貧しい牧師補に過ぎない男性を選んだのは，必ずしも彼への愛情のためだけではなさそうである。後にこの夫が死んで七ヶ月後,[23] the Towers で催された園遊会に，まだ「正式の喪服を着た」(p. 16) ままで出席している Clare は，食欲もあり，無意識に「イタリアの歌曲のメロディを調子のよい声で口ずさんで」(p. 18) いたりして，決して愛する夫を亡くした直後の未亡人には思われないのである。むしろ，Molly に話す，Clare 自身の次の言葉の中に，彼女の選択の本音が見えるように思える。

> 「私は Mr. Kirkpatrick という人と結婚しました。彼は牧師補に過ぎず，貧しい人でした。しかし彼は大変良い家柄の出で，もし彼の親類の三人が亡くなり，彼らに子供もいなかったなら，私は准男爵夫人になっていたところだったのです。でも神はそれを許すのがいいとは思われなかった。. . . 彼のいとこのうち二人は結婚して子だくさんになりました。そしてかわいそうな我が Kirkpatrick の方が死んで，私を未亡人にして行ったのですよ。」(pp. 19－20)

それに,「牧師補は知的職業で,とにかく小売商より一段上」(p. 453) なのである。

しかし准男爵夫人になる代わりに未亡人になって，再び生活費を自分でかせがねばならなくなった Clare は，Cumnor 家の世話でもう一度家庭教師の職に戻る。「先ず Lady Davies の勤め口 . . . それから Mrs. Maude のところ」(p. 101) というように。

> 「結婚が自然なことだわ。それから夫がそういう類の［お金のために働く］嫌な

仕事はすべてやってくれて，妻は貴婦人のように客間に座っているものだ。」(p. 110)

と考えている Clare にとって，再び「お金のためにあくせく働き続けねばならない」(p. 110) のは，「悲しいこと」(p. 110) だったに違いない。後に Clare は，

娘の Cynthia が未亡人になったら . . . 自分が経験してきたのと同じ類の苦労に娘をさらすことになる，という思いから逃れる (p. 456)

ために，様々な陰謀をこらすことになるのだが，そこには，一つには Clare 自身のこの時の経験のつらさが反映しているのである。

しかし当時，財産の無い Clare のような立場の未亡人達が働く場は，例外なく家庭教師の職である。

「それからママは家庭教師として働きに出なければなりませんでした。彼女はそうせざるを得なかったのです，気の毒に！」(p. 253)

と，いつも母に反感を持っている Cynthia でさえ，当時の Clare の姿には同情的に言及している。

しかも今度は Clare には，養うべき娘の Cynthia が居た。娘の養育費の他に，休暇に連れて行けば彼女にかかる「旅の費用のすべてと身仕度」(p. 103) が二倍 Clare の負担になって，あらゆる「倹約」(p. 103) が強制される。Clare は娘を学校へ預けて働いた。Cynthia は，「私は 4 歳で学校にやられたわ，最初或る学校に，それからまた別の学校に」(p. 253)，「多分私は厄介者だったのね」(p. 253) と，母のこの仕打ちを恨んでいるが，Clare のこの時の処置は，やむを得ないものであったと言えよう。

「自分の生活費を先ず家庭教師になってかせごうとしている，あわれな女の人がいるとすると，その人に娘がいれば，それから彼女に何ができるでしょう，その娘を学校へやる以外に？」(p. 103)

と，Lady Harriet が Clare を擁護して言っているとおりである。

更に，娘を学校へやって教育を受けさせることは，それが将来 Cynthia の自活する唯一の道への，準備になるのである。

「私は，Cynthia が教育を完了した時には家庭教師として働きに出る，という以外は思いもしませんでした。彼女はそうなるように育てられてきて，大いに有利な点を持っています」(p. 145)

と，後に Clare は誇らし気に語っている。

その上，まだ若くて「並はずれて美しい」(p. 107) Clare には，再婚をねらうという‘野心’があって，そういう母親にとっては，Cynthia は，「訪問者が来た時，母の客間でぶらつかせておくには大変厄介な年齢の少女」(p. 545) だったことも挙げられる。特に Cynthia は，美しさの点では母親以上だと噂される程の美貌の娘に育ち，そういう娘を身近かに置いておくのは Clare にとって具合の悪いことである。娘の Cynthia の方に実際には求婚し，内密に婚約していた Mr. Preston という27歳の青年に対しても，Clare は町の噂になる位に「大変親密にし」(p. 543)，「当時，彼女は Mr. Preston と結婚できたとすれば，ずい分喜こんだことでしょう」(p. 328) と，Ashcombe の人々に話されている。

このように再婚相手を獲得するためには，娘をもライバル視せざるを得なかった Clare は，その感情をいつまでも失わず，その徹底ぶりをも作者は描いている。例えば後に Clare が Mr. Gibson と再婚することになった時，Cynthia を花嫁付添い人にするためフランスの学校から呼び戻すようにという，Mr. Gibson の親切な申し出を Clare は無視してしまう。その理由

は一つには娘の渡航費を着服するためであり，もう一つは

色あせた花嫁である母親の横で，自分の若い娘に美を誇示させておくことは，自分にはどんなに不愉快なことだろうと感じた（p. 138）

からであった。

こうして Mrs. Gibson になるまで，Clare は最初の夫の死後「ずっと，家庭教師として幾つかの家族を渡って生きてきた」(p. 115)。理由は明らかにされていないがどこも長続きせず，最終的に，そして今度も Cumnor 家の援助で，Clare は Ashcombe に在る，或る学校の経営権を得ることになる。Ashcombe は Cumnor 家がこの州で持っている，もう一つの地所の近くの町で，「彼女は前任者の営業権と備品とを買い取った」(p. 109) のである。そして「Lord Cumnor が，彼の借地人達に Clare を推薦してやった」(p. 139)。これが，*Wives and Daughters* の主要な物語が始まる「二，三年前」(p. 109) のこと，である。

しかしその学校経営も余りうまくいかず，「彼女にできることと言えば，何とか借金せずに暮していくことぐらいである」(p. 101) という状態にいる。

その家には使い古されてみすぼらしい家具が詰まっていて，田舎町の裏通りではよくあることだが，見晴らしは悪く，環境はごみごみしていた。(pp. 108－9)

利益の上がらない学校，つまり家賃[24] と税金，食費，洗濯代，そして欠くことのできない教師達の給料を支払うのに，かろうじて充分な数の生徒しかいない（p. 138）

はやらない学校なのである。

これは当時の，田舎町の小さい私立学校の，現実の一端を示しているのかもしれない。が，Clare が再婚したあと，この学校を引き継いだ「Miss

Dixon が，今ではその同じ家で学校を経営していますが，彼女はそれをずっと上手く運営しています」(p. 328) と Ashcombe の住人に話されているところを見れば，Clare にはもともと学校経営の才能が無かったのかもしれない。

そういう女性でも，自活の道が他に無かったという点が，やはり一番大きな問題であろう。Clare はそうした中で，

> 絹のドレスを裏返しにして縫い直させ，染めさせたり洗濯に出したり，そしておそらく再び裏返しにして仕立てさせて (p. 483)

着るというような倹約ぶりをし，とにかく「借金だけはせずに」(p. 101) 暮していたのである。

> Mrs. Kirkpatrick が，買物をする店の支払にいつも注意を怠らなかったのは，彼女の数少ない尊敬されるべき点の一つだった。それはちょっとした義務感の現われだった。彼女の皮相で薄っぺらな性格から，他のどんな欠点が生じていようとも，この点では彼女は常に，負債を払ってしまうまでは落ち着かなかった。(p. 159)

逆に言えば，Clare はそれだけの自尊心と誠実さとは持ち合わせていたのである。

彼女は自分の代わりに「パンのかせぎ手」(p. 117) になってくれる男性を慢性的に熱望しており，従って，Mr. Gibson が結婚の申し込みをした時に，その医者が彼女にとっては，

> 一時間前には，彼女がその人と結婚する，少なくとも可能性だけはある未婚の男性の一人に過ぎなかった (p. 118)

のに，Clare はただもう「喜んで承諾した」(p. 118) のである。

Mrs. Kirkpatrick が，Mr. Gibson を受け入れた主な理由は，彼女が自分で生計を立てる闘いにうんざりしていたからであった。(p. 142)

生計のためにこれ以上彼女が苦悶する必要は無いのだと感じて，彼女はとても安心したのだった。(p. 120)

結婚式の日の Clare は「輝くばかりに幸せそうで美しく見えた」(p. 181) が，それは「今後は彼女自身がどんな苦労をせずとも，きっと彼女を養ってくれるはずである男性」(p. 181) を手に入れたからである。

こうして Clare はヒロイン Molly の生活に直接かかわってくることになり，Mr. Gibson の方はすぐに自分の再婚を後悔することになるのだが，少なくとも「Mrs. Kirkpatrick の側の，再婚を求める素地」[25] は，読者を充分に納得させるものだったのである。

Clare は一旦 Mrs. Gibson になってからは，「家具のきちんと備わった客間」(p. 117) の有難さを忘失し，「私自身の炉辺，つまり取るに足らない我が家」(p. 415) である Mr. Gibson 宅を，しばしば過小評価して，自分はあたかも Mr. Gibson の情熱に負けた「犠牲者だという役割」(p. 415) を演じるのだけれど，そういう時でも，例えば Lady Harriet が次のように言うと，その辛辣な言葉に含まれている真実味は，Mrs. Gibson は充分感じざるを得ないのである。

「多分あなたの仕事場だった学校の勉強部屋はもっと大きかったことでしょう。しかしそこがどんなに殺風景だったか，樅材の机と背の無い長椅子とマット以外どんなに家具が無かったかを思い出しなさいよ。おゝ，本当に Clare，私は全くママと同じ意見だわ。彼女はいつも，あなたはとてもうまくやったと言っているのよ。」(p. 415)

ところで Clare は，Mr. Gibson と再婚することになった時，彼がよく

はやっている医者であって，今後は経済上の心配を一切しなくて済むのだという安堵を一番強く感じるが，同時に，「他人の意志に服従するという…忍耐を要し，苦痛な…試練から免れる」(pp.159－60) 解放感も，かなり強く意識している。彼女はかつて家庭教師として雇われる立場にあったばかりでなく，その仕事のほとんどが Cumnor 家の後盾によるものであっただけに，特にこの伯爵家の人々からは，これまで幾度も屈辱的な思いをなめさせられてきた。そして「彼女が長年，様々な形で耐えてこなければならなかったこと」(p. 160) は，Clareの心理に深く影響を与えて来た。

もともと彼女は，Lady Harriet の家庭教師としての仕事よりも，Lady Cumnor の雑用係として重宝されていた。彼女は，Cumnor 家の人間には一切逆らわず，一方，他の人々に対しては Cumnor 家の威光を借りて優越感を味わうという生活を，これまで送ってきたのである。

今回も，Clare と Mr. Gibson との結婚の日取りを，Lady Cumnor は「孫たちにクリスマス休暇を楽しいものにしてやる」(p. 157) という気まぐれで，クリスマスまで延期させようとした。

しかし

> Clare はクリスマスまで待つつもりはなかった。そして今回だけは伯爵夫人の意志にそむいて，. . . 自分の主張を通した。(p. 158)

つまりマイケルマス後に結婚したのである。

このエピソードは，Hollingford の貴族の，「時代遅れな . . . 大変ユーモラスな」[26] 暴君ぶりを示すものとして分析されることが多いが，（勿論そういう側面もあるが）これはむしろ家庭教師をしていた女性が，安定した結婚をすることになって，もはや他人の言いなりになる必要がないことを充分自覚しているという，Clare 側の反応の点で興味深いものである。

Clare の同じ意識は次の描写のなかにもうかがえる。彼女は，結婚によって

自分の位置が，彼ら［the Towers の人々］の位置から，より独立したものになって以来，彼らを「Cumnor 家の人々」と呼ぶようになっていた。それは一族に対する彼女の親しさを示す呼び方で，一般に町の人々は「伯爵」とか「伯爵夫人」と呼び慣れていたので，このうやうやしい態度と彼女の呼び方との間の相違は目立っていた。(p. 210)

作中における，Mrs. Gibson と the Towers の人々とのこうした関係は，Hollingford の封建的な地主と住民達との位置をよく示していると同時に，当時の家庭教師の実態をも明らかにしているのである。

Mrs. Gibson になったあとの Clare の描写は，「彼女が浅薄で，軽率で，安楽を好み，気転がきかず，黙っていればいいところを多弁になる」[27] こと，「彼女の人生の目的は自我の満足であり . . . 上の者にへつらい，絶えず出世を志す」[28]，利己的で世俗的な人物であることが描かれていく。例えば彼女は，「自分の利益が，ほかの人の気分によって左右される時以外は，勘のよくない人間である」(p. 204) し，医者の妻であるのに，人の死でさえ，彼女には常にその人の遺産の行方が気にかかる出来事としてしか意味を持たない (e. g., pp. 198, 418, 444, 743)。

しかし彼女は

そういう見え張りでひとりよがりな人物だが，読者に，軽蔑の代わりに同情を呼び起こさせるのは，さすが作者の芸術的手腕であるが，それは Mrs. Gibson になる以前の彼女の生活の苦悶が暗示されるというやり方でなされている。[29]

つまり「Mrs. Gibson (Clare) の肖像の前半期の描写には，彼女をむしろかわいそうに思わせるものがたくさんある」[30] と言えるのである。

3

Mrs. Gibson が Cumnor 家の「お気に入り」(p. 108) であり，the

Towers がMrs. Gibson の「もう一つの家のようなもの」(p. 690) であるのに対して，娘の Cynthia は，「その立派な一族には，昔から反感を持っていた」(p. 410)。Cumnor 家の人々も，この「美しい，抜け目のない Miss Kirkpatrick」(p. 612) に対して，普段から「全く関心など持っていない」(p. 413) し，むしろ「彼女を大変軽んじていた」(p. 410)。そして Cynthia 自身そのことを知っている（「彼らは私が気に入らないのです」(p. 387)）。

Clare が休暇で the Towers に滞在する時には，「そのかわいそうな娘も，母親と一緒に the Towers に来るよう招待される」(p. 104) ことはあったし，Cynthia が家庭教師になる準備として，最後の仕上げに Boulogne の学校へ行けるようになったのも，「Lady Cuxhaven が幾らかお金を贈ってくれた」(p. 547) からであったけれど，それら Cynthia への Cumnor 家の好意はすべて，彼女がただ Clare の娘だからという理由で与えられたものである。

この母娘の，Cumnor 家に対する関係の相違は，同じ家庭教師として生きていかざるを得ない二人の女性の，生き方の対照性を示している。Clare は the Towers の圏内に居て，彼らの力を唯一の頼りにしている。彼らも「彼女が生計を立てるのに，何か手助けができないか頭を絞ってやり」(p. 9)，遂には「それ以上ふさわしいどんな結婚も思いつけない」(p. 117) 程の，Mr. Gibson との再婚を準備してやった。

一方 Cynthia も，自分が「他人の家庭に governess として働きに出なければならない」[31] 運命にいることを自覚している。彼女は Boulogne の学校を卒業すれば，家庭教師として送り出されるはずであった。しかし母の再婚が突発し，Mr. Gibson の親切のおかげで，「Cynthia は今いる学校を卒業するやいなや，彼の娘として家へ来るように」(p. 158) 決められた。そして彼女は作中では一度も，実際に家庭教師として働くことはしないで済む。しかしこれは Cynthia が家庭教師の職と無縁になったことを意味しているのではない。Cynthia も，自分が Mr. Gibson の実の娘 Molly と同じ条件にいるとは決して考えていない。Cynthia は，母の生涯不動産がかろう

じて年30ポンド，それも Mr. Gibson の好意によって持てるだけの，経済的に不安定な位置に居る娘である。いわば Cynthia は家庭教師になる運命を当座の間は延期されているというに過ぎない。Cynthia が，Molly と違って（そして Clare と同じく），常に結婚問題に巻き込まれているのも，それなりに（かつての Clare の場合と同じような）理由がある。

しかし Cynthia は自分のこの運命を，母のしたように the Towers の人々に頼ることによって切り拓くことだけは，決してしようとしない。the Towers の権威を全く問題にしないのは，作中ではただこの Cynthia 一人だけである（Squire Hamley は後に見るように，彼らを“意識してはいるが無視しようとする”態度である）。この点が実は Cynthia の持っている魅力の，最も本質的な点ではないだろうか。Angus Easson も，Cynthia の性質の中に，「因習に拘束されない柔軟さ」[32] を見ている。

ところで Mrs. Gibson と娘の Cynthia との関係で，一番目立つ点は，Mrs. Gibson に対する Cynthia の反発である。Cynthiaは，Mr. Gibson の一家と住むためにフランスから帰ってきた時，初めて作中に登場してくるのだが，この時彼女は，母親にも「二年間の留学の後」(p. 246) 久し振りで会うことになっている。しかし「予定より二週間早まった」(p. 245) 二人の出会いの場面では，Molly を充分驚かせたことには，母娘どちらの態度も大変冷たいものである。その後も「上辺は普通の彼女らの会話に，明らかに何か彼女らだけにわかることが隠されていた」(p. 247) し，特に Cynthia の，母親への「軽蔑」(p. 251) や「抵抗」(p. 257) が繰り返し示され，それは「Molly が Mrs. Gibson をほとんど気の毒に思う程」(p. 257) である。「母へのそういう親不孝な感情の表現が，Victoria 朝の娘にしては異常な程に示される」[33] のである。

この原因は Cynthia の側からは次のように説明されている。

「母は私を（学校へやるのに ── 引用者）手放しても余り気にしませんでした。恐らく私はやっかい者だったのでしょう。. . . どうも私は彼女が，子供の時私を

無視したのが許せないのです，その頃なら私は彼女にぴったりくっついて離れなかったことでしょうに。その上私が学校に居た時も，彼女からほとんど手紙ももらいませんでした。」(pp. 253－7)

しかし Cynthia は，先にも触れたように，或る点では母親のこの無視自体はやむを得なかったのだとわかっている。本当は Cynthia は，Mrs. Gibson が the Towers をはじめ「或る立派な家や別の立派な家」(p. 545) の人々の意を迎えるために卑屈になり，そのためには娘が，「私はとてもママの邪魔になっていたのね，そして私はそれを痛切に感じていたわ」(p. 545) という状態にいることにも鈍感でいられる，そういう Mrs. Gibson の生き方に嫌悪感をもっているのである。そのための Mrs. Gibson の計算高さ，娘や目下の者に，最も肝心な事を自らは口に出さないで真意を理解させる厚顔なこと等々に対して。

Cynthia は，これらはすべて，母親が貴族や金持ちの人々に姑息にへつらわねばならなかったために起こったのだと気付いている。それ故に彼女は the Towers の人々に反感しか感じないのである。[34] (Mrs. Gibson は逆に，再婚後も the Towers の人々の習慣を皮相にまねて，「遅い時刻に正餐をとったり」(p. 584)，いつもフランス料理を作らせたり，「“デビュー”する前の娘達」(p. 272) を人前に出さないなど，上流社会の風習をますます Gibson 家に持ち込み，こうして Gibson 家は「決して終わることのない変化」(p. 209) にさらされることになる。) 後に Cynthia は，自分が以前 Mr. Preston と秘密の婚約をしていたことが露見し，Hollingford 中の噂になり，そのことを Cumnor 家の人々も聞きつけて，監督が不充分であったせいだと母親を責めたと聞いた時，

「彼ら［Cumnor 家の人々］が私に干渉するどんな権利をもっているというの？どういう訳で彼らは，どう話したにせよ私のうわさなんかしたの？．．．殿様と奥様が私の罪や不品行についていろいろお話し下さったというわけね．．．伯爵や伯

爵夫人ともあろう人が，この哀れでちっぽけな私に何の関係があるのかさっぱりわからないわ。」(pp. 629－30)

と怒って叫ぶのだが，この Cynthia の怒りは，自分の人生は Cumnor 家の人間に決して容喙させないという，強い意志を示すものである。

しかし Cynthia は，たとえ母親の生き方には強く反発しても，Cynthia の選べるコースは当時ほとんど決まっていたと言える。結局「家庭教師としてここ［Gibson 家］から出ていく」(p. 381) か，結婚するかである。彼女が「人は定められた運命を逃れることはとてもできないと思う」(p. 381) とか，「人生はとてもわびしいものだと思う」(p. 638) とか，「私は何もかもに大変絶望している」(p. 693) 等としばしば口にするのは，彼女は Clare とは違って，このことの不合理性を感じているせいだと思われる。Arthur Pollard も，Mrs. Gibson と Cynthia との違いに言及した部分で，「Cynthia の性格描写には，悲劇的なニュアンスがある」[35] と指摘している。

Cynthia は，もし家庭教師になるとしたら，自分の出掛けていく可能性のある勤め先として，Hollingford の近隣ではなくて，必ずロシアを想定する。

「Lefèbre[36] 先生の学校にいた同窓生の一人が，モスクワの近くに住むロシア人の家庭に，家庭教師として出掛けて行ったの。私もロシアに勤め口を見つけてくれるよう，彼女に手紙を書こうと思う時が時々あるのです . . . 。」(p. 474)

「私はロシアで運を試してみるつもりです。モスクワに，イギリス人の家庭教師の口があると聞いています。. . . 私は結婚して出ていくのと同じように，この家を出てその邪魔にならないところへ行ってしまうつもりです。」(p. 693)

これは一つには，Cumnor 家に認められない生き方は，Hollingford は勿論のことイギリス国内では，現実には可能性が少ないということを示唆して

いるだろう。しかし同時にここには，Clare 的生き方を批判する Cynthia らしい設定がなされているのだと言える。Cynthia は，せめて母とは違ったタイプの家庭教師になろうとしているのである。

そして「家庭教師としてロシアへ働きに行く代わりに」(p. 674)，Cynthia はロンドンの叔父 Kirkpatrick 家に滞在しに行ったと描かれることになる。「Mrs. Gibson が，立派な親戚を謙遜して隠しておくような人だったとは，思いもかけなかった」(p. 484) と町で噂される程，この London の勅撰弁護士の一家の登場は少し唐突ではあるが，[37] これは Cynthia がそこで結婚相手を見つけるというように物語が展開するための場面設定なのであり，London 滞在が，ロシアの勤め口の「代わりのもの」(p. 674) として作者に位置付けられている点が重要である。つまり Cynthia は，ロシアで家庭教師になる「代わりに」，好ましい結婚相手を見つけたのである。

こうして Cynthia は結局弁護士の Mr. Henderson と結婚することになる。彼女がそこに至るまでの，「彼女の運命との闘い」(p. 382) は，*Wives and Daughters* で語られる主要な物語の一つである。そしてそれもまた，母親の生き方や考え方と対比されて示されることになる。

Cynthia は「若い頃の母に似ている」(p. 146)，美しく魅力的な少女である。作中に登場してくる前からも，彼女はどんな人なのかとても知りたいと，Molly が幾人もに繰り返し尋ねる (e. g., pp. 20, 137, 145, 178, 181) ので，次のことが明らかになっている。即ち Cynthia はとても美しく，美しさの点では細密画に描かれたフランス宮廷美人も及ばないということ，最高の先生達に教育されてきて，今フランスで最後の仕上げをしている大変教養の高い娘だということ，性格の点でも，人がこれまで出会った中で最もかわいく陽気であること等々が。そして実際に Molly (と読者) の前に現れた時も，彼女がうわさ通りの女性であることが示される。

しかも

彼女は周りの皆を引きつけ，影響を及ぼすが，それは . . . 何か口では説明でき

ないし，論理的に述べることもできないものによっており . . . 男性達に対してだけでなく女性達にも及ぼされる類の魅力（p. 249）

であると語られる。Molly はたちまち彼女の魅力に引かれ，「いわば一瞬で彼女が大好きになった」(p. 248)。

こういう個性的な Cynthia を，作者はもう一人の謎めいた女性 Aimée の存在を示唆した直後に読者の前に登場させる。

構成の点でも *Wives and Daughters* はほとんど完璧だ . . . 。[38]

我々に（Osborne と Aimée との秘密の —— 引用者）結婚を知らせてすぐに，Cynthia の到着に話題を切り換えたのは，構成上，作者の見事な処置である。[39]

と指摘されているように，Gaskell の技巧面での冴えを示す展開と言えよう。

やがて Cynthia は，「堅固な道徳性という点では，余り優れている方ではない」(p. 250) と判明する。第一に彼女は16歳の時 Mr. Preston と秘密の婚約をしており，20歳になったら結婚すると約束していた。Cynthia は彼にお金を20ポンド借り，その時には「彼を充分好きだったし，感謝も感じていた」(p. 547) ので，彼の求婚を受け入れたのだった。しかし直後には「どういうわけか」，多分「彼の支配下にいるかのように感じさせられる」(p. 548) のが嫌で，「彼を憎み始め」(p. 547)，婚約を解消する意図を伝えた。が Mr. Preston の方は，「結婚の約束が繰り返し書かれている」(p. 559) 彼女の手紙，さらに「ママについても」(p. 550) Mr. Gibson に見られては都合の悪いことの書かれた手紙を盾にして結婚を強要している。その強引なやり方にますます Cynthia は Preston を嫌いになっているのである。

当時 Cynthia は「構われず放っておかれた16歳の少女だった」(p. 537) という事の他にも，その秘密を知った Molly が，同じ立場に居たら「私もあなたと全く同じようにしたことでしょう」(p. 564) と同情するだけの，酌

量の余地を持っていた（例えば「忌わしい貧困」(p. 475) 等)。それ故 Cynthia は，Preston とのことは済んだものと考えて，「Mr. Preston から自由だという確信を」(p. 556) 主として得るために，19歳になったばかりの頃，今度は地主 Hamley 家の二男 Roger の熱心な求婚を受け入れ，彼と婚約する。Cynthia は

「Roger への溢れるばかりの愛のためというよりも，Mr. Preston へのひどい嫌悪感のために，Preston 以外の別の人と少なくとも同じ位確実に婚約で縛られるのだということが私には有難く思えた。」(p. 555)

と告白している。

こうして Cynthia は「どう見ても一度に二人の男性と婚約している」(p. 633) 状態にいる。もっとも Roger は婚約後すぐアフリカに出発し，一年以上留守にしており，しかも彼は出発前に，自分達の婚約によって「僕は束縛されるが，あなたは自由のままだ」(p. 434) と主張し，Cynthia も「彼がイギリスに戻ってくるまで秘密にしておくことを望む」(p. 435) ので，これも Gibson 一家の人々と Squire の父子しか知らない秘密の婚約である。そして Cynthia は Roger と婚約した日に既に，「私たちは決して結婚することはないでしょう」(p. 439) と Molly に自分の予感を告げており，彼とはもともと結婚する意志は持っていないと言ってよい。

もっともこうした不自然な状況はやがて破綻をきたし，Roger がアフリカにいる間に先ず Preston との件が露見する。それは Molly の犠牲と努力とで収束されるが，Cynthia は Roger に真相を説明したり，事情を釈明することの「屈辱」(p. 636) には耐えられず，何よりも「本当のところは，彼をそこまで愛していない」(p. 636) ために，アフリカの Roger に婚約解消の手紙を出し，彼女は「再び自由だと感じてとても気が楽になった」(p. 636) のである。

そしてその三ヶ月前から Cynthia に求婚し，Hollingford まで彼女を追っ

て来た，「London の第三の恋人」(p. 653) Mr. Henderson と，彼女は最終的に婚約し結婚する。その時 Cynthiaは，

「私には一方の人［Preston］は余りにも悪すぎた，ちょうどもう一人の人［Roger］が余りにも良すぎるのと同じ位に。いま，庭にいる人［Henderson］が中庸というところであればよいと思っている —— 私自身もそうだから」(p. 700)

と，自分を納得させるのである。

以上のような Cynthia の恋愛の軌跡は，一見，彼女が道徳的にいかに無節操であるかを示しているように思える。実際 Cynthia は，次のようにも描写されている。

彼女は揺りかごにいる時から墓に入るまで，たまたま同席することになるどんな男性にも —— 彼が若かろうと年をとっていようと —— その受けをよくするために，上品振った最もかわいい態度を本能的にとるような，生まれついてのコケットの一人であった。(p. 540)

Cynthia 自身も

「私は好まれるのが好きです。私が知り合いになる人には皆，私を好きになるよう仕向けたくなるのは，私の生まれつきなのです」(p. 472)

と自認しているし，Mrs. Gibson でさえ娘を，「Cynthia は，そんなに志操堅固な方ではない」(p. 571) と言っている。先の三人の男性達との‘婚約’以外にも，最初は Molly に求婚するつもりでやって来た Mr. Coxe が，Cynthia の「愛想のよい」(p. 624) 態度を誤解して，彼女に求婚するという事件も起こっている。

しかし Cynthia の恋愛の基準はいつも，相手の男性を愛しているか否か

であって，その限りでは Molly の考え方に一致している。そしてそれは常に母親の Mrs. Gibson の思惑の不純さと対比して示されるために，逆に Cynthia を潔癖に見せる作用をしている。

Cynthia の恋愛観と母親のそれとを，次に幾つかの例を通して比較してみよう。

①地主の Hamley 家には二人の息子が居り，Mrs. Gibson は先ず長男の Osborne と Cynthia とを結婚させようとする。それは「Hamley 家の不動産が限嗣相続される」(p. 208) からである。Mrs. Gibson は次のように言っている。

「私はあの Osborne Hamley がとても好きです。彼はなんと素敵な青年でしょう！　どういうわけかいつも私は長男がとても好きになるのです。彼は地所を受け継ぐことになっているのでしょう？　私はパパに頼んで，彼がしょっちゅうこちらへ来る気になるよう勧めてもらうつもりです。彼はあなた［Molly］や Cynthia に，とても良い，とても楽しい知り合いになることでしょう。」(p. 208)

しかし Osborne が心臓疾患で命が長くないかもしれないということを（医者の診断を立ち聞きして）知った Mrs. Gibson は，すぐに弟の Roger の方に照準を合わせ，彼に対するそれまでの態度を変更する。

「Roger が Cynthia に恋心を抱いているのが私にはわかっていました。誰にでもそれはわかったことでしょう。そして Roger がただの二男で，何の職も無く，ただ Fellowship があるに過ぎない限りは，. . . 彼に思いとどまらせるのが正しいと私は思いました。」. . .（しかし）「彼が Hamley の跡を継ぐ見込みが充分あるという条件なら，Cynthia への彼の求婚も」（値打ちがあり，――引用者）「私は大いに奨励してやったのです。」(pp. 444－5)

それに対して Cynthia は，Roger と婚約するための，先に見た，全く別

の理由を持っていただけでなく，財産相続の見込みという点に関しては，

「もし Roger がママと同じように考えを押し詰めるかもしれないと一度でも疑わしく思えたら，私は決して二度と彼とは口をきかないことでしょう。」(p. 496)

と宣言する。

②後に Roger との婚約解消の手紙を，Cynthia はアフリカの Roger 宛に出すと同時に父親の Squire 宛にも出したのだけれど，それはたまたま，Osborne が突然死ぬ前日のことだった。それで事態は Mrs. Gibson にとって「とてもしゃくにさわること」(p. 654) になった。Mrs. Gibson は

「ちょうど Cynthia が Roger を放棄した直後に Osborne の死が起こったなんて！　もし彼女が（決心し，手紙を出すのを —— 引用者）もう一日待っていさえすれば！」(p. 654)

と叫ぶ。しかしその後，実は Osborne は生前秘密の結婚をしていて，しかも子供まで一人居ることが発覚すると，Mrs. Gibson はたちまち意見を変え，Cynthia に言う。

「あなたは Squire にきのう手紙を書いておいて本当に良かったと思うわ。というのは —— あの時には余りに急ぎ過ぎると私には思えたけれど —— もしあなたが今日までそれを延ばしていたら，彼はあなたが婚約を放棄したことに，何か利害に関わる理由があるのだと推測したかもしれません。」. . .「その隠し子は勿論男の子に決まっていますよ。だから跡取りになるでしょう。そして Roger は今までどおり貧乏なままでいることでしょう。今や明らかになったこれらの新しい事実を，Cynthia はあの手紙を書いていた時に全く知らなかったのだという点を，必ず Squire にわからせて下さいよ，Molly。私は自分と関係のあるどの人の回りにも，ほんの少しの俗臭も漂って欲しくはないのです。」(p. 656)

一方 Cynthia の方は，Roger との婚約解消そのものにしか関心を持っていず，事態がどう変化しようと無頓着である。むしろ婚約を解消したために，

「まさに昨夜は一晩で，私がここ何週間もかかって感じてきた以上の満足を感じました。私は自由になって嬉しいのです。」(p. 657)

と述べる。そして Osborne がそんなに長い間結婚を秘密のままにしておかねばならなかった点に同情を寄せ，「彼女自身の隠匿」(p. 656) と引き比べて，「彼もそれを隠しておくための，苦労や心配を全てしたのを気の毒に思う」(p. 656) のである。Cynthia はもともと Mrs. Gibson に反抗的な態度を示してきているのだが，特にこうした場面での二人の対応の対照性は，Mrs. Gibson への批判者としての Cynthia の役割を鮮明にしていると言える。

③Cynthia の第三の恋人 Mr. Henderson は「ハンサムで，紳士的で，気軽に話をし，優しくて親切な」(p. 701) 男で，「法廷弁護士」(p. 706) になった人物であるが，Molly には「平凡なありふれた人」(p. 701) に思える。しかし Mrs. Gibson には次のように観察されている。

「Mr. Henderson はたっぷり私有財産を持っていて，もっとたくさん持ちそうなんです。だから遊び半分と言える程度に弁護士をしていられるのです。彼は Cynthia にぞっこん惚れ込んでいました。」(p. 570)

それに「弁護士の将来性は無限です。大法官になってごらんなさい，富と同時に称号も手に入ります！」(p. 695) と。従って Cynthia がまだ Roger と婚約中の時，何も知らない Henderson からの結婚申し込みを当然断わったと聞いて，Mrs. Gibson は

「ねえ，どうしてお前は Mr. Henderson をお断わりしたの？　あんなにすば

らしい青年で ── そしてあんなに立派な紳士なのに！　お前の叔父さんは，その上彼にはとてもたっぷり私有財産があると私に話していたのですよ。」(p. 623)

と詰問する。

「私は Roger や彼にまつわる何やかやを尊敬してきましたよ，勿論。しかし彼を Mr. Henderson と比較すると！　Mr. Henderson はとても美男子だし，育ちがよくて，手袋なんかもすべて Houbigant から購入しているのです！」(p. 571)

Mrs. Gibson にとって，この時点で Osborne が死にそうでなく（「彼は全く元気にしているに違いない。」(p. 571)），むしろアフリカに行っている Roger の方が死の危機に瀕していること（「アフリカは，単に健康に悪い所だというだけでなく ── 野蛮で ── 一部では人食いさえする地方なのですよ！」(pp. 608−9)）を思えば，Mr. Henderson との結婚の方が遥かに望ましいものなのである。

一方 Cynthia は，「英雄的な道徳性」(p. 622) を発揮し，「Mr. Henderson によってなされた（第一回目の ── 引用者）求婚は拒絶した」のである。

④その後 Cynthia は，先に見たように Roger も正式に断る。この事態に，Mrs. Gibson は次のように反応する。

「私はこういうことを欲得ずくで見るのはとても嫌です。しかし Cynthia がそんなに立派な縁組みを二つも放棄するのを見るのはしゃくにさわることです。最初 Mr. Henderson を断わり，そして今また Roger Hamley を断わってしまったのですよ。」(p. 655)

Mrs. Gibson にとっては，別の人との婚約中に新たな結婚申し込みを断わることと，元の婚約を解消することとは，同じレベルの問題なのである。

一方 Cynthia は当然そうは考えない。つまり Mr. Henderson は Cynthia の London 再訪中の態度に勇気付けられて，「彼女に再び求婚した」(p. 691) が，今度はそれは，「自由な状態にいる」(p. 657) Cynthia に受け入れられる。この時 Cynthia は，受諾の経緯を，当然母とは逆に，先ず Roger との婚約を解消したあと Henderson の求婚を受諾するという風に，順当に考えている。つまり「古い恋を脱いで，それから新しいのを身につける」(p. 695) 決意をしたのである。

ところで Cynthia の一連の恋愛事件に於て，作者は必ずしも Cynthia を好意的には描いていない。例えば Mr. Henderson と Cynthia との出会いから結婚に至るまでの経過にしてもそうで，Cynthia はアフリカにいる婚約者 Roger が病気だったことを知らせてきた手紙が届いた日に舞踏会に出かけ，そこで Mr. Henderson に初めて出会い，彼に深い印象を与えたことになっている。

このように Cynthia は小説の後半になる程昔の Clare と同じ側面が強調されてきて，Cynthia が本来持っていたはずの魅力の多くが否定されていく気がする。そして最後は男性達の評価しか気にしない，全く鈍感な少女になってしまっているように思われるのである。これは Cynthia が（母と同じように），結局は結婚によって彼女の境遇を脱するしか仕方がなかったためである。

しかし Cynthia の行動は，以上見てきたように常に Mrs. Gibson の意見や願望と並列して描かれ，その対照性が目立っている。つまり Cynthia の恋愛は，Mrs. Gibson の思惑と異なって，相手の男性の財産や身分に一切左右されることがない。従って Cynthia は少なくとも Mrs. Gibson のような 'mercenary' (p. 655) で，見栄を張りたがる俗物ではないということ，また他ならぬ Cynthia が，Mrs. Gibson のそういう側面に一番激しく反発しているという確信を，読者はいつも与えられることになるのである。

4

このように，Cynthia の場合は金持ちの弁護士と結婚することで，彼女達 governess 予備軍のかかえている問題が解決されることになった。その点では，母親の世代と同じだということになる。が作者は，一つは彼女と母親との対立という構図を使い，もう一つは Cynthia の恋愛の相手となる男性達を新しい人物像として描くことによって，Cynthia という女性の新しさを強調していると言える。先ずここでは彼女の初恋の相手 Mr. Preston の場合を見てみたい。

Preston は Cumnor 家の有能な地所差配人で，最初は Ashcombe の領地を，次いで Hollingford の領地を任される青年である。27歳の，「才気あふれた，聡明な . . . 非常に器量の良い男である」(p. 106)。

> Mr. Preston はとてもハンサムで，自分でそのことを知ってもいた。. . . また軽やかでしなやかな身体つきをしていたが，それはスポーツの訓練によるものだった。彼の腕前は有名で，さもなければ彼が本来所属しているはずの社会よりも，遥かに高い社会に参加する許可を彼が与えられているのも，そのおかげだった。彼はクリケットの第一級の名手だった。またとても射撃がうまいので，猟の解禁日に獲物の量に対する評判を望む家はどこも，喜んで彼を客に迎えた。雨の日にはお嬢様方に玉突きを教えてやり，求められれば大真面目にゲームに参加した。素人芝居の半分はすっかり暗唱していて，即興のジェスチャーゲームや活人画を脚色する時には，とても重宝だった。(pp. 174－5)

つまり Prestonは地主の地所差配人というより，地主の息子らしい趣味を持ち，行動をとろうとしているのである。その意味で象徴的な事件が第26章でも起こっている。それは彼が慈善舞踏会に出かける Cynthia に贈ってきた花束が，地主の息子 Hamley 兄弟が Molly と Cynthia に贈ってきた花束と図らずも競合することになった事件である。もっとも Preston の花束

は火の中に投げ込まれるのだけれども（この場面はまた，次の舞踏会そのものの場景とともに，Cynthia が Preston と秘密の結びつきをもっていることを示す，興味深い箇所でもある）。

後に彼は Cynthia にふられたあとで，次のように言う。

「僕には他に，結婚していたかもしれないお金持ちの娘が二人や三人は居た。そのうちの一人は全くの美人で，それに彼女の方も不承不承どころではなかったのだ。」(p. 558)

また

彼は自分に言い聞かせた，もっと地位も富もある女性がたくさん，喜んで彼と結婚することだろう，と。そのうちの何人かは，その上かわいい女性でもあるのだ，と。(p. 589)

これは必ずしも Preston の負け惜しみではない。実際彼は，地所差配人としての腕を雇い主の Lord Cumnor に高く評価されているだけでなく，どこへ行っても人気者なのである。彼が Hollingford へ赴任してきた時には，「彼の愛想のよさ，人づきあいのよさ，気立てのよさ，その他様々な，人を快適にする『～のよさ』」(p. 399) のために，幾日も「パーティが，『まるで彼が花嫁であるかのように』，彼に敬意を表して開かれた」(p. 399)。

もっとも，Preston の人気は醜聞と紙一重のところがある。たとえば

「彼は出身地 Henwick で，大変美しい Miss Gregson という人と婚約していましたが，彼女の父親が問い合わせをして彼についての悪いうわさを余りにたくさん耳にしたので，娘にその縁組みを破棄させたのです。そしてその後その娘さんは亡くなりました。」(p. 515)

と，Hollingford の住人に話されている。そういう．特に女性問題をめぐる，彼の疑惑に包まれた側面は，初対面から Molly が彼をひどく嫌うということによって強調される。

Wives and Daughters を論ずる批評家達の，Preston 像の評価は，これら女性問題や，Cynthia を脅迫する点に焦点が当てられるので，概ね不評である。一般には "unscrupulous Preston"[40] とされている。それでも「Cynthia への彼の愛は誠実で，『男が感じうる限りの真実で純朴なものだった』」[41] という点は強調され，

> この小説では，俗悪で派手な Mr. Preston も，たとえ執念深さの伴った激情によるとしても，心から恋に陥ることを許されている[42]

と分析される。

しかし Arthur Pollard が（多くの批評家と同じように）先ず

> Preston は，最も厳正な意味で副次的な人物である。彼は筋を進める目的のために存在する。[43]

と述べ，Cynthia を悩ませる原因という役割に注目した上で，

> しかし Mrs. Gaskell は，彼が不本意ながらもやむを得ず雇い主達に従う姿を描き，彼を社会機構の中にきちんと組み入れている

と，Hollingford 社会での彼の地位に言及している点は重要である。Preston は地所差配人としての側面を抜きにしては語れない，複雑な人物として描かれているからである。

先ず Preston の恋愛観から見ていきたい。Preston をめぐる噂の女性達の中で，Cumnor 家の末娘 Lady Harriet も，「彼に恋をした称号のある

婦人」(p. 548) として，彼の流したらしい噂話の中に登場する。もっとも Molly は Lady Harriet の態度を直接身近に見聞きするので，Harriet の冷淡な振る舞いが，「前日 Mr. Preston が，自分はお嬢様と親しいのだとほのめかしていた」(p. 183) のとまるきり異なるのに驚いたりする。その上これら Preston の“恋愛事件”が，Cynthia との件以外すべて過去のものなので，作中では噂話として言及されるに過ぎない。従って Miss Gregson との事件も，Lady Harriet との間柄も（特に後者は Preston が自分で言っているだけなので），*Sylvia's Lovers* に於ける Kinraid の場合のように，その真相はわからないのである。

しかし Mr. Preston に対する Lady Harriet の態度には，作中ではっきり断定されていないものの，不自然なところ（むしろ Preston への満たされない恋と言えるもの）が少なからずあり，それは Preston の勝手な思い込みだけではないと思わせるものがある。例えば Lady Harriet は一族の中では庶民的な女性で，「町の人々が the Towers にやって来る時大げさな敬意と称賛」(p. 185) を示すのを，面映ゆく思ったりするのだが，Mr. Preston には異常に「横柄な態度」(p. 185) をとる。そして彼は「ひたすら敬意だけを払うべき相手に，色男ぶった慇懃さを示す」(p. 183) 男だと，彼には近づかぬよう Molly にも警告する。彼が口にした或る申し出を Lady Harriet が断る場面でも，同席していた Molly は，

> Mr. Preston にはひどく嫌悪を感じて後ずさりしたものだが，それでも彼がたった今受けた拒絶を見ると，彼が気の毒になった (p. 185)

程である。この時も Harriet は，

> 「私は彼が本能的に嫌いです。もっぱら本能的なだけというわけでもないのだけれど。実際，根拠があることなのだから。」(p. 186)

と言う。もともと Lady Harriet は，親に勧められている結婚を，「愛の問題にはうんざりしてしまった」(p. 104) と言って，「当の紳士に反対する理由が何も，両親には見つからない」(p. 104) のに，彼らを憤慨させてまでその紳士（後に登場する Sir Charles Morton のことであろうが）と結婚するのを頑固に拒絶している，と描かれている。

後に Molly が Preston の恋人だという，事実無根の噂が流れた時には，Lady Harriet は

「私はいつもあの少女［Molly］が好きでした。そしてパパの模範的な地所差配人［Preston］には私はがまんすることができません。. . . あの美しい抜け目のない Miss Kirkpatrick が，この話の本当の主人公であるという方がずっとありそうなことです。. . . しかしやはり私の友 Molly がそうだということになれば，私は教会に行ってその結婚に異議を申し立てるつもりです。」(pp. 612−3)

と，事態の調査に乗り出していく。その熱心さは母の Lady Cumnor にさえ，

「本当に Harriet，これらのつまらない Hollingford の事柄に，いつもどうしてお前がそんなに興味を持つことになるのか，私にはわからないよ。」(p. 613)

と言われている程である。

そして Preston を詰問し，彼から「実は，Miss Kirkpatrick に，かなり長い期間婚約していたあとで捨てられたのだ」(p. 618) という「屈辱的な告白」(p. 618) を引き出すのである。しかしこの時 Harriet が何故，「Mr. Preston に対して初めての . . . 愛嬌のある率直なほほ笑み」(p. 618) を浮かべて，

彼が自分の美男子振りにつけ上がって，Lady Harriet に色男気どりの馴馴し

い調子をとり，彼が対等の者にするように彼女を私事にわたってほめそやした，何年も前のこと（p. 618）

を許す気になったのかは，理解しにくいところである。

むしろここでは，Mr. Preston が感じる気持ち ── 自分の個人的な問題に Lady Harriet が係わってきて，いくら領主の娘だからといっても「Lady Harriet がこんな風に彼に質問してくる権利があるのか疑い . . . 挑戦する」(p. 618) 気持 ── と，彼の毅然とした対応の仕方とが印象的である。Harriet に対しては父の Lord Cumnor でさえ

「Harriet，お前は余りにも行き過ぎだ。── 我々には Mr. Preston の私事を詮索する，何の権利も無かったのだ。」(p. 618)

と娘をたしなめている。Lady Harriet には，Mr. Preston と Molly とのこの事件でも，先ず Preston が置かれている状況に関心があったのである。

ここでは Lady Harriet の気持を少し詳しく検討してみたが，Lady Harriet の，Mr. Preston への真意が何であれ，作品では Mr. Preston の方の態度が重要なのである。Lady Harriet は，先に見たように，「あの手の［Mr. Preston のような］人物は我慢できない」(p. 183) と言い，それは彼女によれば「ひたすら敬意だけを払うべき相手に，色男ぶった慇懃さを示す」(p. 183) からであった。つまりそれは，Mr. Preston が，領主の娘 Lady Harriet をも，自分の恋愛の対象として考える人物であることを示している（この点は，Mr. Gibson が自分の属する社会階層の中から結婚相手を決めたのと，対照的である）。

Mr. Preston はそういう恋愛観をもつ男性であるが故に，Cynthia に対する彼の愛情も，彼女の家柄や財産に対してではなくて，全く彼女個人への愛になり得たのである。Preston は Molly にこう訴える。

「一文無しの少女であるという，彼女［Cynthia］の立場については，あなたはよく御存知でしょう。そしてあの時には，富の代わりになったり，私の出世の助けになるような，どんな有力な姻戚も彼女には無かったのだから，私の思いは，男が感じうる限りの真実で名利を離れた情熱だったのです。」(p. 558)

また

彼は自問した，何故自分は，風のように移り気な一文無しの少女をいつまでも渇望し続ける程，そんなに途方もない愚か者なのか，と。その答えは論理的には全くばか気たものであった。が，実際，説得力はあった。つまり Cynthia は Cynthia なのだった。それで美の女神本人でも，彼女の身代わりとはなり得ないのだった。(p. 589)

恋人へのこの真摯な Preston の姿勢は，初めて出会った時から彼を嫌っている Molly にさえ感銘を与え，「彼は彼なりにあなたを愛しているのだと思うわ」(p. 563) と Cynthia に言わざるを得ない類のものである。そして逆に言えば，そういう男性 Preston を最初に愛した Cynthia は，Preston のこの性質に共鳴しうるものを持っているのである。

次に Preston の職業意識を見てみよう。彼の原型は *The Moorland cottage*[44] の agent, Mr. Henry に認めることができる。Mr. Henry は領土内で起こる不正事件に対しても，情によるのではなく法に訴えることで対処しようとし，その点では地主の Mr. Buxton 本人よりも厳格で合理的である。Preston も，Cumnor 家の人々との間で，主従関係ではなく，純然たる雇用関係で対等につき合おうとする，いわば近代的な姿勢を見せる人物なのである。その点でも，同じような立場の医者 Mr. Gibson より，Mr. Preston の方が更に一歩，意識の点で進んでいると言える。また Mr. Preston は特に，古い型の前任者，「気難しく，無愛想で . . . 利口な老男やもめ」(pp. 398−9) の Mr. Sheepshanks と対照的に描かれている。

Mr. Preston の勤務ぶりを象徴する一つの出来事が,第30章で起こる。Cumnor 家の土地の排水工事に携わっている労働者達が，隣接した Hamley 家の地所に侵入し，たき木用にはりえにしだを引き抜いていると聞いた Squire は，工事を監督している Mr. Preston にそれを注意する。しかし Mr. Preston は Squire の「年や地位」(p. 394) によって黙らされるのではなく，逆に更なる証拠を要求する。それは Squire には「横柄」(p. 393) だと思える態度である。が，“その侵入の現場を Squire 自身が見たのではないのだから，幾らかの調査をするまでは，

「あなたの得た情報[45] が正しいかどうか，私は疑うことだってできる。. . . あなたの地所に被害が加えられていると私が確信した時には，今後はそういうことが起こらないよう手段を講じるつもりであるし，それに勿論，殿様の名において補償するつもりである」(p. 392)”

という Mr. Preston の言い分は，道理にかなったものでもあろう。

しかしいかに Mr. Preston が恋愛観や職業意識の点で新しいものをもっていても，彼は Cumnor 家の地所差配人で使用人に過ぎない。彼が the Towers で話題になった時（それはまた彼が作中で話題になる最初の場面であるが)，雇い主の Lady Cumnor は，

「地所差配人がハンサムか否かを私は決して考えはしない。彼らはその外観に私が気を留める階級の人間には属していない。」(p. 106)

と，冷淡に言い切る。Lady Cumnor に限らず，Cumnor 家の人々から彼はそのように見られ，また実際そのように扱われているのである（それだけに，先に見た Lady Harriet の Preston への感情が仮に愛情であるとしたら,それは実際に作品に描かれているように複雑に屈折して表わされることになっただろう)。

Molly が Cynthia の手紙を取り返すために，Cumnor 家の力を借りようと思いついたのは，まさにこの，Preston の唯一の，しかも最大の弱点ともいうべきところを突いたのである。Preston は「自分の前に . . . おびえて立っている娘［Molly］が，どのように賢くてそれを見抜いたのかしら」(p. 561) と思う。

> 彼は賢い地所差配人で，そのために伯爵に大層気に入られてはいたが，それでもこれらの手紙に関して彼の身に覚えのある品行や，それらに関して彼の持ち出した脅しは，まさに，紳士や高潔な男や男らしい男であったなら誰も，自分の回りにいる人物がそんなことをするのに我慢できないことであると Mr. Preston は感じた。彼にはそのことがよくわかった。. . . 彼は手紙を放棄しなければならないだろうと感じた . . . 。(p. 561)

つまり Cumnor 家の人々は，Preston の恋愛事件は単に「Mr. Preston の私事」(p. 618) だと言いつつも，その個人的事件のせいで彼を解雇することが大いにありうるということを，Preston は充分知っているのである。彼は何事も「Lord Cumnor の指令によって」(p. 103) 行動せざるを得ない，Cumnor 家の一奉公人なのである。

Cumnor 家から解雇されたら，彼の存在は無に等しいし，[46] 彼の地位は全く Cumnor 家の意のままである。「彼は今ではここから三マイル離れた Cumnor Grange に住んでいます」(p. 693) と言及されるのが，作中で Preston の動向が具体的に記述される最後のものになっているのは象徴的である。彼は，彼自身の意志や希望に全く係わりなく，Cumnor 家の意向でどこへでも転任させられてしまうし，転任先でも完全に Cumnor 家の配下に入らねばならないのである。

恋愛観をはじめ多くの点で新しい側面をもっているにもかかわらず，Hollingford では Preston の立場は，自由主義的知識人である Mr. Gibson や Roger Hamley（そして Cynthia をめぐって本当のライバルになった

Mr. Henderson）とは，基本的に異なっていることになる。新しい女性 Cynthia が，Mr. Preston に一旦は引かれつつも，最後には Mr. Henderson という弁護士と結婚するのは，後者が「私有財産をもった」(p. 696) 独立した知的職業人であるからで，それは Cumnor 家の権威への反抗者であった Cynthia の，（勿論意図的ではないけれど）いわば当然の選択だったのだとも言えよう。

しかしそれでも作中での Preston の存在は，特にその恋愛観の新しさの故に印象深いものとなっており，彼が Cynthia，Molly，Roger らと共に新しい世代を構成する資格を充分与えられていることがわかる。地位も財産もない Mr. Preston が，自分の才覚と美貌とを利用して，金持の女性か「富の代わりになったり出世の助けになるような有力な姻戚を持つ」(p. 558) 女性と結婚しようと思えばできたのにそうはせず,ひたすら Cynthia を愛したという点が，Hollingford の社会で Mr. Preston の持つ本質的な素晴らしさだからである。これは Mr. Preston が出世の野心を人一倍持っている男であっただけに,一層貴重でさえある。

作者は Mr. Preston の卑怯さに対しては，ヒロイン Molly に嫌われるという形ではっきりと非難し，また全体として Mr. Preston を作者は決して肯定的に描いてはいないが，彼の恋愛観に対しては，彼の恋の対象を，Roger でさえ愛した女性と同一人物にすることによって，かなり高く評価して描いていることがわかる。更にそれだけの価値ある Preston の愛が，結局 Cumnor 家の無言の圧力で敗北させられるという形で示されているので，読者には，Preston の無念の思いが伝わるものになっていると言えよう。

〔註〕

1）A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (New York: Octagon Books, 1971), pp. 283−8.

2) Margaret Lane, "Introduction" to *Wives and Daughters*, Everyman's Library (London: Dent, 1982), p. 9.

3) *ibid.*

4) Laurence Lerner, "Introduction" to *Wives and Daughters* (Penguin Books, 1969), p. 25.

5) David Cecil, *Early Victorian Novelists — Essays in Revaluation* (London: Constable, 1966), p. 216. 初版は1934年。尚，訳するにあたって邦訳『イギリス小説鑑賞 — ヴィクトリア朝初期の作家たち —』鮎沢乗光・都留信夫・冨士川和男共訳（開文社，1983）を利用させて戴いたが，人名表記は原典のままにした。

6) *ibid.*, p. 217.

7) Margaret Ganz, *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict* (New York: Twayne, 1969), p. 181.

8) cf. *ibid.*, p. 167.

9) Cecil, *op. cit.*, p. 217.

10) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention* (Linden Press, 1970), p. 478. 尚この点については拙論「Elizabeth Gaskell の最後の小説 — *Wives and Daughters* — Mr. Gibson の生き方をめぐって」（桃山学院大学総合研究所『人文科学研究』第25巻第2号）で詳しく分析した。

11) Ganz, *op. cit.*, p. 278.

12) A. W. Ward, "Introduction" to *Wives and Daughters* (New York: AMS Press, 1972), p. xxv.

13) Hopkins, *op. cit.*, p. 287.

14) cf. Arthur Pollard, *Mrs Gaskell: Novelist and Biographer* (Manchester U. P., 1965), p. 238.

15) cf. Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (Oxford U. P., 1965), p. 216. Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (London: Routledge & Kegan Paul, 1979), p. 191.（以下 *E. G.* と略）

16) Cecil, *op. cit.*, p. 217.

17) Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (London: Paul Elek, 1975), p. 192.

18) *ibid.*, p. 187.

19) Easson が Clare の無節操な点を，作中での「彼女の名前の多様性」(*op. cit.*, p. 191) との関連で触れているように，彼女は "Hyacinth Clare, Mrs. Kirkpatrick, Mrs. Gibson" として登場する。拙論では主として彼女が再婚するまでは（作者もしばしばそうしているように）Clare とし，再婚後は Mrs. Gibson として，一応区別した。

20) *The Works of Mrs. Gaskell* (New York: AMS Press, 1972), vol. Ⅷ: *Wives and Daughters*, p. 752. 以下引用文のページ数はこの版に拠る。

21) Ganz, *op. cit.*, p. 278.

22) Sharps, *op. cit.*, pp. 488－9.

23) Mr. Kirkpatrick が亡くなったのはいつか，作中では必ずしも統一されていないようである。ここでは Clare は「七ヶ月前に未亡人になった」とされているが，この時娘の Cynthia は12歳位である。しかし後に Cynthia が，父親の亡くなった時の話として語る内容（「父は，私がとっても小さい時に亡くなりました。それで私が父のことを覚えているとは，誰も信じていません。」(p. 252)）や，Cynthia が，父親の死後，母親と別れて「4歳から」(p. 253) 学校に行かされていた等という記述からは，Mr. Kirkpatrick の死はもっと以前でなければならないことになるだろう。

24) p. 101. では，「家賃無しで」借りていることになっている。

25) Hopkins, *op. cit.*, p. 284.

26) Ward, *op. cit.*, p. xxvi.

27) Gerald DeWitt Sanders, *Elizabeth Gaskell* (New York: Russell & Russell, 1971), p. 135. 尚，初版は1929年。

28) Hopkins, *op. cit.*, p. 283.

29) A. Stanton Whitfield, *Mrs. Gaskell: Her Life and Work* (Folcroft Library Editions, 1974), p. 182. 尚，初版は1929年。

30) Pollard, *op. cit.*, p. 233.

31) Winifred Gérin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford U. P., 1977), p. 282.

32) Easson, *E. G.*, p. 193.

33) Hopkins, *op. cit.*, p. 288.

34) Pollard は，「少女の頃，母にほとんど会えない原因の一つだと思っていたその立派な一族への，Cynthia の反感」(p. 410) を，Cynthia の感じた淋しさの面から注目している (cf. *op. cit.*, p. 239) が，Cynthia は更に，この貴族の高慢さと母の卑屈さとに反感をもっていると思われる。

35) Pollard, *op. cit.*, p. 242.

36) この人名が最初に出てくる p. 159 では Lefèvre となっているが，ここ (p. 474) を含め p. 257, p. 548, p. 549 では Cynthia の会話中での言及として，Lefèbre になっている。他の版は Everyman's Library (Dent) では 1 ヶ所 Lefevre，4 ヶ所が Lefebre となっており，The World's Classics (Oxford U. P.) では 5 ヶ所共 Lefevre となっている。Penguin Books では 2 ヶ所が Lefevre，3 ヶ所が Fléchier となっている。(cf. この人名の不統一については Easson, "Introduction" (below, note 42), p. xxxi.) 尚，一般にフランス人名表記では Lefèvre 或いは Lefebvre が普通のようである。

37) 但し，この一家への言及は前の方にもあり (e. g., p. 253) (cf. *Wives and Daughters*, The World's Classics (Oxford U. P., 1987), pp. 718−9), Cynthia の曾祖父が准男爵に当る (cf. p. 453) のだから，存在そのものは唐突とは言えない。

38) Sanders, *op. cit.*, p. 136.

39) Pollard, *op. cit.*, p. 245.

40) Hopkins, *op. cit.*, p. 289.

41) Lansbury, *op. cit.*, pp. 201−2.

42) Angus Easson, "Introduction" to *Wives and Daughters*, The World's Classics (Oxford U. P., 1987), p. xvii.

43) Pollard, *op. cit.*, p. 242. 次の引用文も同所に。

44) *The Works of Mrs. Gaskell* (New York: AMS Press, 1972), vol. Ⅱ. 尚, Sharps が, Squire Hamley と Mr. Buxton との類似を指摘し (*op. cit.*, p. 481), 「この二冊の本には密接に似かよった数節がある」と脚注でも触れているように, agent 以外にも, 両作品は関連性がある。

45) "your informant" となっている版もある (The World's Classics 版 p. 354)。

46) この点ではむしろ前任者の Mr. Sheepshanks の方が自立していたと言える。作者はこの前任の agent と伯爵家との関係を, 第1章で「彼は実際余りに金持ちで楽に暮せるだけのものがあったので . . . 地所差配人の地位を余り維持したい気にはなれなかった」(p. 3) と記述している。

(1990. 9. 28 受理)

Elizabeth Gaskell: *Wives and Daughters*
On the Governess Question

Shoko Nakamura

It is generally said that Elizabeth Gaskell, unlike many nineteenth-century women writers, thought comparatively little of the governess question. But she was well aware of the matter and depicted governess life so vividly and accurately in *Wives and Daughters*, the author's last novel.

In *Wives and Daughters* there are two governesses. One is Mrs. Kirkpatrick, née Clare, a widow, who had been a governess before her marriage and now manages a private school at Ashcombe, a small town close to Hollingford. She becomes the second wife of Mr. Gibson, Molly's father. The other is Cynthia Kirkpatrick, the new Mrs. Gibson's daughter by her first husband. It is true that Cynthia doesn't get an actual position as a governess in the novel, but there is a very fair possibility of her becoming a governess. She is at school in France trying to perfect herself in the French language. Her main purpose is to improve her prospects as governess or teacher. Cynthia is nearly eighteen, old enough to go out as a governess.

There was really no socially acceptable position of women except governesses. If a girl, a spinster or a widow of good family had to earn her living, she had to go out as a governess to a strange family, or manage a school at the best. Clare had been a governess to the young ladies at the Towers, the Cumnors' country house, and is their favourite and is treated in a patronizing fashion. She makes good use of favour with the great family, and can escape the usual fate of the governess by remarry-

ing wealthy Dr. Gibson, the Cumnors' family doctor.

On the other hand Cynthia wants to carve out her own future. Teaching is her original intention and she doesn't regard a marriage as a means of escaping her bitter fate. As she is a very beautiful girl, she is loved by many men and finally marries Mr. Henderson, a rich barrister. Her marriage, unlike her mother's, is the natural result of love, not the calculated end attained to escape the odious work as governess. Besides, each of her lovers , consciously or not, takes a critical attitude toward old-fashioned people of Hollingford. Cynthia also, like her sister-in-law, Molly the heroine, has a new view of marriage.

Through these two types of governesses, Gaskell shows the difference between the old one of Mrs. Gibson who has no choice except marriage and the new one of Cynthia who can change her own fate by struggling against the group prejudices or hoary fallacies in Hollingford.